

# 支配からの離脱

## — 秦 軍 東 征 —

堀 黎 美\*

### Freedom from Domination (Part 3)

— Qin jun Dong zheng —

Reimi HORI

During the period toward the end of 1970's through 1989, Chinese literary circles were vibrant with life and energy. However, Tien An Men Incident on June 4, 1989, drove Chinese government to exercise stricter ideological control over the men of letters, letting some of them change their occupation or give up writing ; thus the period of literary inactiveness followed for several years.

Unexpectedly, in 1993 the remarkable phenomenon called “Qin jun Dong zheng” (or “Shan jun Jin jing”) turned up. That is, the authors in Hsian replaced those in Beijing to publish controversial works one after another vigorously.

The subject of this treatise is to substantiate the fact that Chinese writers are now demolishing the long-binding idea of the literary arts being meant to serve the politics of the proletariat, through the analytical study of the common issues observed in several literary works which include, among others, an argumentative bestseller book reported to be suppressed eventually, though not officially announced.

#### はじめに

'70年代末期から'89年に至る期間は、中国の文芸界にとって活気にみちた年代であったが、'89年6月を境に政府の思想的締めつけが厳しくなったこと、それを嫌って作家自身が転業したり沈黙したことが相まって、文芸界の低調が続いていた。それが'93年に入り秦軍東征（あるいは陝軍進京）と称せられる現象が発生、つまり西安の作家達が大量して問題作を発表したのである。この現象は約1年で下火になったのであるが、それらの作品群の中からベストセラーになり、物議もかもした数篇を通じて浮び上ってきたものを分析し、あわせて中国の作家が長期にわたって拘束されてきた共産党の文芸理論から、いかに自己を放ちつつあるのか、秦軍東征作品群中の主力を

---

\* 教養部

なす長篇小説を紹介しながら見ていく。

作品の選択に関しては、「素以沉重著称的陝西作家群今年以来，可謂在中国文壇出盡了風頭。在短短的幾個月時間里，陳忠実，賈平凹，高建群等5位陝西作家的長篇力作接連由北京的人民文学出版社等5家出版社推出併在文学界及廣大讀者群中掀起強烈的冲擊波，这一現象被評論界称为“秦軍東征”。」（『廢都廢誰』P90）

「北京十月文芸出版社，人民文学出版社，作家出版社，中国文联出版公司等北京四大文芸出版社機構，近期各推出一部重頭長篇小説，皆系陝西作家的作品，分別為“賈平凹的《廢都》，陳忠実的《白鹿原》，高建群的《最後一個匈奴》，京夫的《八里情仇》。“陝軍東征”博得一片喝采，“黃土地”文学再度震動文壇。

《光明日報》称贊這四部小説“都有雄心問鼎中国長篇小説創造最高獎茅盾文学獎”，併暗示文壇“應該好好總結一下陝軍東征現象，看看他給中国文壇带来了甚麼新啓示。”」（『廢都廢誰』P98）などの論によった。

—

白 鹿 原

陳 忠実著 49万6千字

白鹿原（地名）における祖先を同じくする白家と鹿家の，清末から今世紀50年代始めまでの確執を中心に，史実を踏まえた重厚な物語。族長白嘉軒の一代記でもあるのだが，登場人物が多岐にわたるため，彼の遠縁で白家の作男鹿三の長男黒娃（鹿兆謙）を中心に要約する。

白嘉軒らが村のために私学を作り，長男孝文，次男孝武を通わせた際に同じ年頃の黒娃にも機会を与えた。黒娃は主家の息子達よりも鹿子霖の長男兆鵬によくついていた。だから後に兆鵬が共産黨員として黒娃の前に出現した時も心情的に同調したのである。私学を卒業後彼は父の後を継ぐのを断わって村を出ていき，しばらくして田小娥を結婚相手として連れ戻った。不審に思った父の鹿三が調べてみると，小娥は黒娃の雇い主の第二夫人で，黒娃の方が誘惑され，密通がばれて殺されかけ，女の方も婚家を追われ実家からも縁を切られ，止むなく逃げてきた事実が判明する。鹿三は怒って二人を叩き出したので二人はやむなく村外れの窑洞（ほら穴式住い）を買って修理し住む。黒娃は一生懸命働き一年余の後には多少の貯えもでき，土地も少し買って鶏や豚も飼えるようになった頃，新しくできた村の県立小学校の校長となっていた兆鵬に呼ばれる。兆鵬は親同士がきめた漢方医の冷先生の長女と結婚させられたのを嫌って，家に帰らず学校で起居している。彼は時の政府が農民から徴発した食糧を入れてある倉庫の焼打ちを計画し，黒娃の協力を要請する。焼打ちは成功し，兆鵬はますます黒娃への影響を強め，他の事情も加わって遂にそれぞれ山に割拠しているゲリラ軍団に身を投じる。

黒娃の不在の間に兆鵬の父子霖が黒娃の妻小娥を誘惑し，更に小娥を唆かし，すでに世帯を構えている白孝文を誘惑させる。孝文は小娥にのめりこみ子霖がそれを白嘉軒に密告，族長である父の知る所となり，二人は祖廟の前で裸で縛られ一族の全員に刺のついた枝で鞭打たれる。よく出来た孝行息子だった孝文は人柄が変り，アヘンを吸い，分家して貰った財産をつかい果し，妻を餓死させ，乞食に身を落とす。その惨状を見かねた鹿三が孝文を救う。孝文が新しい職，県保

安大隊部秘書につく前の軍事訓練を受けに行っている間に、小蛾が窖洞で殺されているのが発見されるが犯人は分らない。戻ってきた孝文はそれを知り嘆き悲しみ復讐を誓う。ある事情から心ならずも匪賊になった黒娃も犯人は白嘉軒と思いこみ、復讐のため殺そうとするが、その時鹿三が証拠の刀を見せ、犯人は自分だと名乗る。黒娃は父を殺すことはできず、行方をくらます。

一方西安で勉強中の兆海（兆鵬の弟）と嘉軒の一人娘靈靈は愛し合っていたが、折しも国共合作の時代で、二人はコイン占いで兆海が国民党に靈靈が共産党に入党し、やがて国共合作の決裂とともにそれぞれの党規に殉ぜざるを得なくなり悲恋に終る。後に靈靈は党の命令で兆鵬と偽装夫婦として暮さねばならなくなり、兆鵬との間に一児をもうける。兆海は国共内戦中に紅軍に殺され、靈靈も出産後党の根拠地に入り、整党運動（実際は内部抗争）にまきこまれ、スパイの疑いを受けて生き埋めにされる。靈靈は白嘉軒に親子の縁を切られており、混乱の時代のその死はある偶然から80年代に入って50を過ぎた息子の調査でやっと分るのである。

白孝文は抜擢され国民党軍の営長となり、県都内外の防衛を指揮する立場になる。彼はかつての悪評を消し父親と和解しようと考えている時に、匪賊の副頭目の黒娃が捕えられて来、それを耳にした白嘉軒は黒娃の命乞いをするが、公私は混同できないと断わって帰宅すると、妊娠中の再婚した妻を人質に連れ去り黒娃の仲間が待ち伏せしている。黒娃を殺せば彼の妻、先妻の遺児達、孝文が将来結婚するすべての相手とその子、白嘉軒全員を皆殺しにすると言われ、孝文は黒娃をひそかに脱獄させる。引きかえに妻が戻り、過去のいきさつは不問に付すと黒娃が言ったことを知り、孝文は背筋の凍る思いであった。黒娃逃亡の責任を問われ獄丁の一人が処刑された。

山に帰った黒娃に兆鵬からは共産ゲリラに、孝文からは保安団に帰順するよう呼びかけがあるが黒娃にはその気がない。ところが頭目が急に毒殺され、犯人はおそらく共産党への内通者だと孝文に指摘され、黒娃も迷ったあげく県の保安団に手下と共に帰順し、営長に任じられる。孝文はしみじみと「これで遂に借りは返せたね」と語る。黒娃は孝文の仲介で教育のある高玉鳳と再婚し、新婦を村に連れ帰り祖廟で結婚の報告をし、父親、親戚、村人と和解する。直後に鹿三は世を去る。黒娃は営長の職務をきちんと果すかわら、一生懸命書物に親しみ勉強し、そしてひそかに共産ゲリラを助ける。

西安が紅軍のものになり、孝文達の県を解放するため、国民党軍将校に身をやつした兆鵬が黒娃を訪ねてくる。三営長の黒娃は一営長孝文、二営長を味方につけた上で張団長を説得に行く。張団長が「自分はもう引退するから君達のする事に邪魔だてするつもりはない」と言明したのに、孝文は彼をその場で射殺する。クーデター成功の翌日兆鵬は西安に去り、新たな戦闘任務につき新疆へ行ったと聞くがその後の消息はない。

県が解放されて半年、副県長となっていた黒娃が突然逮捕された。監獄から何度も県長白孝文に会わせてくれるよう頼むが聞き入れられない。黒娃を逮捕できるのは誰か？思い出すのはクーデター成功後三日目《群衆日報》にのった、賀龍元師が「(滋水) 県保安団一営長白孝文同志」の宛名で表彰した電文を見た二営長の言葉である。「クーデターを成功に導いたのは君（黒娃）だ。白孝文ではない」そして彼は張団長を正面から射殺した白孝文が恐ろしいと、団を離れ帰郷した。

黒娃は全く理不盡な罪名により、多くの人の嘆願も空しく銃殺される。

陳忠実が5年の歳月をかけて世に問う白鹿原は、陝軍東征諸作品中一の力のこもった作品である。読後痛感したのは、中国人として生をうけ生き抜いていくということは、何と難しいことかであった。その難しさの所以を列挙すれば、A、地理的、風土的条件の厳しさ、B、貧困、C、根強い因襲、D、人間関係、E、国家権力による収奪、F、絶えまない国家権力奪取をめぐる抗争などであろうか。これらに通底しているのは同じ原因といえるのかもしれないが、他の作品からも読み取れるA、Bを除いた部分につき少し述べる。

C、黒娃の最初の妻田小蛾は、無知で淫乱な女として軽侮の対象にされているが、黒娃の雇い主の第二夫人として登場した彼女の生活の実態は、権力を握る第一夫人が毎夜小蛾の寝室に来、小蛾の体内に干しなつめを数個挿入し翌朝取り出しに来て、洗って夫に食べさせ精力増強をはかる、ただそれだけの役割で、あとは下働きの女中として人間扱いされていない。もし彼女が最初からまともな結婚をしていれば、それなりに幸せな人生を送れた女だと思う。金持の妾に売られたのに不義を働き婦道に背いたとの理由で、婚家からも生家からも叩き出され、白鹿原に来てからも皆にいやしめられるのである。だから彼女の死後村人の心の中にも後めたさがあり、それが崇りとなって村人をおびやかしたのだと思う。

Dについて一つだけあげるなら白孝文であろう。父嘉軒が7回目の結婚でやっと得た長男孝文は、まじめな孝行息子で親の決めた結婚をしてからも結婚の意味も知らずに数日過すほどの堅物だったのだが、田小蛾に狂い出してからは分家された家産を蕩盡し乞食に落ちぶれ、捨てられた妻を餓死させてしまう。その後鹿三に助けられ国民党下に仕官すると忠実に共産党狩りにいそしみ、いとこの鹿兆鵬まで捕えようと躍起になる。ところがその後共産党が力を得そうだと見てとると、殺す必要のない上官を殺し、恩人鹿三の息子で幼なじみの黒娃の功を横取りし、殺すのである。小説はそこで終わっているのだが少し先を想像すると、その後孝文は共産党の幹部として結構高い地位に昇ったと思われる。旧家に生れ大切に育てられ、高い教育を受けたにもかかわらず徹底した利己主義者である。文化大革命の際にも冷酷な機会主義者が輩出した事実と照し合わせると、中国社会（に限らないだろうが）が内包している弱肉強食の原理は恐ろしい。

E、F、この物語の主人公は孝文の父白嘉軒で、清末から'50年代始めまで、族長として、義兄の非常に聡明な学者朱先生の助けを借りながらどのように一族を率いていったかが語られているが、真の主人公は中国近代史である。百年に満たない時間に多くの政変があり、日本軍の侵略もあり、白鹿原も無関係ではいられなかった。入れかわり立ちかわった国家権力は白鹿原に何をもたらしたか。この小説で見る限り、白鹿原はどの政権からも収奪されただけである。'50年代初期で終わっているため解放後、つまり共産党政権に関してはあまり触れられていないが、数年前まで必ずつけ加えられていた“こういう苦難を経て、明るい解放の朝が来た”とか“すべて偉大な共産党のおかげである”といった書き方は決してされていない。思うに長い歴史を有する中国の民衆にとっては、共産党政権も歴史上の通過点の一つであるのかもしれない。

二

廃 都

賈 平凹著 約40万字

西安の東4百キロの潼関は近頃すべてに不満を抱くひま人が多くなっているが、その中の周敏という男が美しい人妻唐宛児と西安にかけおちしてくる。所持金が心許なくなり建設工事現場で働いているうちに孟雲房と知り合い、就職口を依頼すると、親友の売れっ子作家庄之蝶に頼んであげようと請け合う。しかし之蝶が旅行中で不在のため、之蝶の名義で彼の昔からの友人景雪蔭（高級幹部の娘で西安文芸界に力を持っている）に手紙を書き、ある雑誌社に仮採用して貰う。周敏は非常に喜び、有能さを発揮して本採用になろうと張り切って庄之蝶の半生記を書いて発表するが、その中で景雪蔭と庄之蝶がずっと恋愛関係にあっかの如く描いたため、有夫の景雪蔭が怒り心頭に発し、周敏、之蝶、雑誌社を告訴する顛末を縦線に、之蝶の多彩な女性関係——中でも唐宛児との情事が克明に（但し大部分は伏字）描かれている。

作者は国外でも名を知られた人気作家で、これまで主に西安近郊農村を舞台にした“福州もの”を中心とする長中短篇を多数発表している。長篇「廃都」（短篇にも同名の農村を舞台にしたものがある）は、作者が始めて都会人の生活を描いたもので、発表前から評判が高く、出版されると作者の個人的事件——実生活でも永年連れ添った妻と離婚したこと、彼の熱烈なファンであった台湾の女流作家の自殺——及び性愛描写によってセンセーションを巻き起こし、48万部を即売、但しその後の再版は許可されない由、作品に関する批判、論争をまとめた「廃都廃誰」「賈平凹怎麼啦——被刪的6986字背后」といった評論集まで出版されている。性愛描写に関しては'70年代始めのベストセラー、浩然の作品中で主人公の男女の淡いキスシーンが大いに問題になったのと比較すると、隔世の感があるが、『一晃蕩，我在城里已經住罷了二十年，但還未写出過一部關於城的小説。越是有一種内疚，越是不敢貿然下筆，甚是連商州的小説也懶得作了。依我在四十歲的覺悟，如果文章是千古的事——文章併不是誰要怎麼写就可以怎麼写的——他是一段故事，属天地早有了的，只是有沒有宿命可得到。』（ふらふらしているうちに都会での生活も20年経ってしまった。だがまだ都市を描いたものを書いていない——中略——私は40歳になった時このように思った。もしも文は永遠であるとするならば——文は決して誰かにどのように書けと言われて書くものではない——それは一つの物語で、この世にとっくに存在していたこと、ただ取り上げられるかられないかの運命があるのみだ。廃都 P519后記から）と作者が言っているように、作者が廃都で描いているのは、西京における①文学を含む芸術界。まやかし、麻薬、乱倫、家庭崩壊、贈賄、詐欺。②司法界。収賄、情報漏洩。③政・官界。収賄、権力乱用、強姦。④宗教界。贈賄、墮胎。⑤商業界。贈賄、過大広告など、ざっと取り上げるだけでも都市を構成している現代中国社会各界の退廃、墮落である。一例を挙げれば、訴訟に持ちこまれた庄之蝶、周敏側の対策は、之蝶の妻牛月清が、物品を贈ることで担当裁判官を味方につける一方で、之蝶は性交渉のある美人の使用人柳月を市長の身体障害者の息子と結婚させ、市長から裁判長に圧力をかけさせるという次第で、中国の現実から見て荒唐無稽のこととは思われない。またこの作品が現代中国の都市生活の

一断面を切り取った、と作者が言っていることから見て、確かに生活水準は5年前と比べてもかなり高くなっているのが分るが、人心の荒廃——自己浄化作用を持たない一党独裁の45年に及ぶ政治が、長い伝統を有する封建思想と結びつき、人間をいかに退廃させているかをうかがわせる。

### 三

最 后 一 個 匈 奴

高建群著 42万2千字

楊干大は、中原からいつの間にか姿を消してしまった匈奴の最後の子孫である。貧しい暮らしの中から息子に教育を受けさせる。時は'20年代半ば、国共合作の頃である。息子楊作新は教師の影響もあって共産党に接近していく。その後国共は分裂し、このため金持の娘ミス趙との仲は引き裂かれてしまう。(但し楊作新はすでに親が決めた妻がおり、その結婚相手への結納金がないため妹蛾子を他村の男に嫁がせ、それで得た結納金を転用した。端的にいうならば売買婚で、兄妹共やがて離婚し、楊家はのちに多大な災難に見舞われることになる)追われる身となった作新は、かつて彼が命を救ったことがある、今は匪族の頭目となっている黒大頭の許に身を寄せ、その息子黒寿山の家庭教師となる。黒大頭の妻で名家出身の白氏の美しさに一驚する。やがて黒大頭は罠にかけられて捕えられ、妻の黒白氏や作新の必死の救助活動も空しく殺されてしまう。黒白氏の実家に母子を送り届けた作新は、その旅の途中で黒白氏と激情の一夜を共にする。

組織の命により小さな町の小学校長として赴任した作新の所へ、今や督学官となったミス趙がひんぱんに訪れ噂となる。母親及び周囲が心配し喬麦という娘と再婚させる。'20年代末から'30年代中期にかけて陝北の地は革命武力闘争の激烈な舞台となり、作新も指令により学校を離れこの地を根拠地としていた毛沢東の下に参じた。その頃離れて暮す妻に息子楊岸郷が生れる。しかし、ほどなく作新は党からスパイの嫌疑を受け逮捕され、偶然のある事情もあって自殺する。

下巻は彼らの子供達の話である。作家志望の楊岸郷は、文化大革命中父親の問題で大学を追われ、工場で各地から集められた禁書等を燃す仕事に従事しており、一部は燃さずに残し自分の糧として孤独に暮している。ある日紙や本の山の中に「最後のうた」と題した原稿を見つけ、目を通して感動する。その時の彼には分らないことであったが、原稿の作者丹華は、文革中に北京からこの地へ下放させられていた娘で、文革が終息した現在家に引きあげる準備のため、かつて出版社から送り返された原稿を処分したのである。彼女には出発前にどうしてもしておきたいことがあった。友人からゆずり受けて自分が大切にしている《妊婦》と題する剪紙の、天才的才能を持つ少女を訪ねることだった。丹華は三日がかりでその少女が住むという呉児堡へ出かけて行く途中窯洞の店でそばを食べたが、入口の所にいた男がそんな彼女をじっと見つめていた。まもなく乞食の少女が入ってきて丹華の食べている前に立ちつくしているの、哀れに思った丹華が娘にもそばを買い与えると、むさぼるように食べつくし、極度の空腹時にいきなり多量に食べたのが原因で、店を出ていった直後丹華達の目の前で少女は死ぬ。その少女こそ剪紙の作者だったのである。丹華は窯洞の入口にいた男(楊岸郷)に手伝ってもらい少女を埋葬する。

岸郷は作者の分らない原稿を出版社に送り採用される。作品は評判がよく、岸郷が原稿発見のいきさつを説明しても信じてもらえず、つぎつぎに原稿依頼が舞いこむようになり、もともと作

家志望の彼は書きためてあった自作を発表し、徐々に名を成していく。

その頃すでに55才になっていた黒寿山（岸郷の父作新がかつて教えた匪賊の頭目の息子）が、当地の市委書記として着任する。彼は母親の黒白氏に特に言いつけられていた、作新と息子岸郷の名誉を回復し、転勤の世話をする。丹華は香港行の意を固め、出発前に黒寿山に会いに行き、自分は以前黒寿山と相愛の仲だった今は亡き丹娘の娘、つまり黒寿山の娘であることを打ち明け、つぎの日機上の人となる。

パリで万国博が開かれ参加した岸郷は、記者となって来ていた丹華と出会う。二人はこの時はじめて「最後のうた」の作者が丹華で、死んだ乞食娘を埋める時手伝ったのが岸郷であったことを互いに知るのである。二人は激しく求め合い、語り合った一夜を過し、それぞれの人生に立ち帰っていく。

この小説は構成上自然さを欠く。下巻の登場人物が、全員上巻の二、三代目であること以外両者にあまり関連性がない。書き加えると丹華の母丹娘は、かつて楊作新と結ばれずに終わったミス趙の娘である。上巻は波乱万丈の講談的面白さがあるにはあるが、下巻は何とも荒っぽい。作者の意図はもちろん違うだろうが、両者を関連づけているのは貧困であろう。

上巻は窯洞と虱の世界。楊作新が小学校長として赴任した土地では、蛆虫が湧かない漬物はまづいと人々に信じられていたし、そもそも楊作新の教育費は、彼の母が嫁入りの際彼の父に頼んだ唯一の条件、窯洞の入口を石材で囲むことだったが、そのために貯めたお金を転用したのであり（ちなみに下巻の最後に、岸郷が今なお窯洞に住む叔母蛾子に対し、その宿願を果してやる）本人には相談も同意もなしに、親が作新の最初の妻灯草を貰うために、当時13才の蛾子は売られたのである。

古い昔のことはおくとして、下巻に出てくる、災難にあって一家離散しなければならなくなった農村の乞食娘に、羊肉入りそばを与えた丹華が、凄い勢いでかき込む少女を案じて止めるのに対し「我餓，我真餓，我好久没有這樣吃一頓了！」（P340 おなかすいてるの、本当にすいてるのよ、ずっと食べていないんだもん）そして「你会撑死的！」（食べすぎて死んじゃうわよ！）と心配する丹華に「寧做撑死鬼，不做餓死鬼，這是我奶奶說的。做了撑死鬼，下世，就再也不会餓肚子了！」（飢え死にするくらいなら、食べ過ぎて死ねっておばあちゃんが言った。食べ過ぎて死んだら、生れかわってからも飢え死にはしないはずだよって！）と言って店を出ていった直後倒れ、「我是撑死的，阿姨！你做証，我是撑死的！」（わたし食べすぎて死ぬのよ、おばちゃん、証人になってね、わたしは食べすぎて死ぬのよ！）の言葉を残して息絶える。これが'79年8月のことである。その死体の処理の仕方にも驚かされる。丹華は最初「警察に届けなければ」と言ったのだが、「こんな時代だし、こんな所まで乞食娘一人のために、警察がわざわざ来るはずがない」と言う岸郷の言葉に、それもそうだと納得した丹華は岸郷に手伝わせて埋葬するのである。'80年代始め頃までの中国の一般庶民の生活は本当に苦しかったのである。

## 四

八 里 情 仇

京夫著 60万3千字

荷花と林生は中学の同級生で（当時の農村では、中学卒は村の幹部支部書記などより、ずっと高学歴の場合が多かった）将来を誓い合っていたが、村の党支部書記だった父が地主階級出身に区分され、林生は労働改造に送られることになったため、理由を隠して他村に住む荷花に別れを告げる。絶望した荷花は、郵便局員だった父が、ある日突然理由も分らず逮捕されてしまったこともあって、病弱の母と幼い弟二人を抱え収入も途絶え、仕方なくよい条件と思えた八里鎮の男の申し入れに応じ嫁ぐ。しかし嫁いだ男は見合いの席にいた男ではなく、火傷で片脚を切断し顔がめっちゃめっちゃになった興啓であった。あまりのことに話が違うと帰ろうとする荷花を、村人は閉じ込め、縛り、下着まで引きはがして興啓にあてがう。だが興啓は男性の機能も失っており「これは自分が望んだことではない。あんたがあまりにも気の毒だ。今は監視が厳しいが、そのうちきつと逃がしてやるから」と約束する。気を取り直した荷花は、これも運命と八里に止まる決心をする。この事件の裏には、八里鎮の党支部書記左青農の深い恨みがあった。左青農の妻はお互いに配偶者としっくりいっていない荷花の父と愛し合い、娘を生んでいたのである。妻の体は力づくで自由にしても、心は絶対自分のものにならないのを知って、不幸な育ちで性格がゆがんでいる青農は復讐を誓い、たまたま食糧貯蔵庫の番をしている時に自分の不注意から失火し負傷した興啓を、英雄としてまつり上げ、妻の相手を投獄し、その娘を罠にかけたのである。興啓の形相のあまりの恐しさに誰も世話をするのをいやがるので、英雄に不自由をさせてはならないと荷花をあてがったのである。彼は更に収入のない興啓のために荷花に仕事を世話し、その弱味につけ込み荷花を凌辱する。やがて文化大革命が始まり、青農の権力はますます大きくなっていく。

一方林生は労働改造から命がけで逃げ、興啓と荷花の家にかくまわれることになった。事情を知った興啓は、ひそかに荷花と林生を結婚させ三人で暮っていたのだが、これに気付いた青農は荷花の体を自由にしても、やはり心を得ることができない恨みを林生に向け、文化大革命の武闘の中で命さえ奪おうと、あの手この手で迫る。

下巻は十数年後になっていて、青農は火紙（死者のために燃やす紙幣）工場を経営して羽振りがよく、興啓、荷花、名誉回復された父の許に帰った林生はともに貧しい。荷花と林生の間に生れた金牛は興啓を父と信じており、妻と離婚した青農は、妻と荷花の父との間に生れた娘秋英をどうしても妻に渡さない。この若い二人が愛し合うことでますます大きな悲劇が生じる。最後は興啓が病気を苦にして自殺、それを見た金牛は林生が殺したものだと思いこみ林生を刺す。自分達の仲を周囲はどうして反対するのか不審に思った秋英は、生母を訪ね出生の秘密を知り、金牛とは叔母、甥の関係で、結婚できないことを金牛に知らせるにしのびず、冷淡な態度で別れを告げ、それにショックを受けて金牛は自殺してしまう。青農の工場は全焼し、彼は脳溢血で体の自由を失い、荷花は息子に刺されて死んだと思っていた林生とめぐり合い、驚きと喜びで林生の腕にくずおれる。



八里は地名、情仇は恋敵の意味であるが、この小説は道具だては違っても佳人才子がさまざまな困難に見舞われ、命さえ危険にさらされるが、遂に結ばれる伝統的な通俗小説の域を出ていない。主人公達が邪悪な男に徹底的に痛めつけられるのは、文化大革命開始前後から現在に至る時代背景から考え、かなり理解できるのだが、事に当っての判断や処理法はやはりその人間の器量を問われる訳で、結果的に詰めの甘い、愚かな選択ばかりしてしまう主人公の無能さに苛立ちを感じるし、邪悪さも浅薄に見えてしまう。文学として成り立つためには、登場人物の内面をもっと掘り下げ、邪悪さを描くにしてもたとえばシェイクスピアの造型したイヤーゴ、ディケンズの描いたユーライア・ヒープなどのように、人間の本質を掘り起し、描き出していかなければ、長く読者の共感を得るのは無理なのではあるまいか。白鹿原の白孝文の方がずっと迫る恐しさがある。ただ、文革時の派閥間の武闘、経済開放政策を導入後の共産党幹部の構造汚職などの面はよく書き込まれていて興味深かったし、貧しさと人の移動のない閉ざされた村の人間関係に結びついた、絶対権力の恐しさはよく分る。女主人公がどうやらだんだん宗教に近づいていくらしいのも、今後、中国人一般民衆の魂の一つの帰結となるのか考えさせられた。

## 五

騷 土

老村著 25万字

文革中の'67-'69年に至る期間、文革を発展させるために上部から派遣された、季（世虎）工作組と呼ばれる共産党員及び村人の話。季工作組は手始めに学校の先生を公開批判の対象にしたり、北京の会議に参加しますます尖鋭の度を強めたり、県都に武闘に行ったり、宿泊先の人妻と寝たり忙しい。村には解放前の地主で鄧連山という男がいる。彼の一人息子有柱は、幼時飼犬に咬まれ男性としての機能を失っているのだが、父親は嫁を貰ってやる。嫁芙能は夫有柱に当然失望するが、がまんしていれば、いずれ財産を継げるのを期待しているうちに、これでは家が絶えると心配した連山に犯され、息子雷震を出産する。鄧家は財産家のためかねてより匪賊に狙われており、防衛用に爆弾を保有していたのだが、新中国成立で財産は没収されたうえ、爆弾の所有を反革命と見なされ連山は捕えられる。連山の収監中、あてにしていた財産もだめになった芙能は雷震を捨て他の男の許に走る。生活能力のない有柱はとり残されて茫然としている時、四十代半ばの翠花という女が言葉巧みに近づき、家財を騙しとってしまう。隣村の親戚が怒って取り戻しに押しかけると、翠花は息子達とともに自分も一糸まとわぬ姿になって、大武闘を展開し抵抗するが連山の親戚に奪い返されてしまう。

一方、高級幹部の息子だが、父に捨てられ、それが原因で母が憤死した大害という男が、仕事先で女と問題を起していらなくなり、村に戻ってくる。党の誤った政策で村人が餓死しかけているのを見、仲間らと語らって無断で村人のために貯蔵庫を開け、食糧を配ってやる。

10年の刑期を終えて連山が帰村する。孫（実は息子）の雷震がとても賢い子に成長しているのを見て喜び、この子のためにも自分の汚名を挽回し、毛沢東思想の積極分子に生れ替ったことを示そうとして大害を密告、大害は反党分子として銃殺され、結局連山も首を吊って自殺する。

文化大革命当時の極貧の村の様子が、明清市井小説の文体を借りて語られる。作者自身が前書で「金瓶梅、紅樓夢」の影響を大きく受けたと言っているように、大胆な性描写が特徴で、暗い窖洞の中で展開される、中国語で言うところの乱七八糟（乱れに乱れたさま）な性関係は、まさしく騷土と名づける以外ない世界が描かれている。

### おわりに

五作品を通じて最も顕著なのは党の威信の低下である。作家がそれぞれ共産党とは距離を置いているのは明らかだ。黄土高原地帯はもともと共産党とは縁が深い。毛沢東の出身地にも近いし、党の根拠地が置かれていた時もあり、母胎ともいえる土地である。「最後一個匈奴」中にも毛沢東が登場する場面がある。楊作新の遺児岸郷が幼なかった頃、彼が誰の子であるか知った毛沢東が話しかけるシーンその他で、忠実な同志であった楊作新がなぜ死を選ばねばならなかったか、その間の事情を知っているから話しかけたのであろうが、楊作新の名誉が黒寿山の手によって回復されたのは毛沢東の死後であり、そのために岸郷は人々に辱められ、辛酸をなめたのである。党の無謬に固執するためか、過去の忌わしい事件の追及が、現在の秩序を損なう恐れがあるせいか不明だが、犠牲にされた側にとっては人生を狂わされた大悲劇である。物語の背後には同様の事実がかなりあったことがうかがわれる。ともあれ“下部構造が上部構造を規定する”のが社会主義のテーゼだったと思うし、下部構造は通常経済を指すはずだが、改革開放政策、社会主義的市場経済と言葉を飾っても、市場経済は競争原理に基づく資本主義社会のものなのであるから、そこに基盤を置いて、上部構造である政治などだけ社会主義の堅持を叫ぶのは、所詮無理なのである。共産党は求心力を失いつつあり、“解放”後45周年を経て、中国はまた新たな解放に向いつつある。当然のことながら人々はそれを知っている。賈平凹の言もそれを証明している。「一個時代有一個時代作品，我應該爲其而努力。現在不是產生絕對權威的時候，政治上不可能再出現毛沢東，文學上也不可能再有托爾斯泰了。」（浮躁 P 4 序言二。一つの時代にはその時代の作品があり、当然私はそのために努力しなければならない。現在は絶対的權威の生れる時ではない。政治上に毛沢東が再び出現することは不可能であるし、文字上も再びトルストイが現れるのは不可能であろう）と。

### 引用作品

|           |       |            |          |       |
|-----------|-------|------------|----------|-------|
| 1) 白鹿原    | 陳忠実   | 人民文学出版社    | 1993年6月  | 北京第一版 |
| 2) 廢都     | 賈平凹   | 北京出版社      | 1993年6月  | 第一版   |
| 3) 最後一個匈奴 | 高建群   | 作家出版社      | 1993年9月  | 北京第一版 |
| 4) 八里情仇   | 京 夫   | 中国文联出版公司出版 | 1993年1月  | 第一版   |
| 5) 騷土     | 老 村   | 中国文学出版社    | 1993年10月 | 第一版   |
| 6) 廢都廢誰   | 肖夏林主編 | 学苑出版社      | 1993年10月 | 北京第一版 |
| 7) 賈平凹怎麼啦 | 蘆 陽   | 三联書店上海分店出版 | 1993年12月 | 第一版   |
| 8) 浮 躁    | 賈平凹   | 作家出版社      | 1992年12月 | 北京第二版 |

(平成6年10月27日受理)